

街路樹

学力向上に向けて ⑩

～ 指導とは……～

今年度、学校指導訪問ではたくさんの学習指導案、そして授業を参観し、日々指導のためにご尽力されている先生方の熱意と児童生徒への想いを垣間見ることができたわけだが、少々気になる点について述べてみたい。

ふだん私たちは、子どもを指導するにあたり、「児童生徒の実態を的確に把握し……」「児童生徒の考えやよさを大切にしながら……」等々の文言を指導案に記述したり口にした。そのいずれもが時には心地よく、あたかもそれをいつもやっているかのような錯覚に陥ってしまう。しかしよく足もとを見て、児童生徒の姿に目を移してみると、「どうかな？ どうだったのだろう？」と一瞬とまどうことが多い。

話は変わるが、新聞や雑誌を読むたび、教師は精一杯実践しているにもかかわらず、子どもたちの命を危険にさらしてしまった事例を目にする。

その例として、教師は毎日、学級の児童全員と「生活記録」交換をしていた。点検印の押印のみならず丁寧に目を通し、赤ペンも入れていたが、SOSのサインを出していた子どもの自殺を予見できなかった。

また、休み時間に生徒同士がふざけている様子を巡回の教師が目撃しながらも、言葉だけの注意を与えて素通り。その結果、事故を招き被害者の生徒は障がいを抱える身体になってしまった。

これらの教師に共通している特徴がある。それは、

○何もしなかったわけではないこと

○やる気のない無気力教師でもないこと

つまり、「点検した」「注意を与えた」という形はあるが、教師からの一方通行に終始しただけだったことがわかる。

形だけをつくり、いかにも自分は指導に熱心だ、丁寧な学習指導に日々追われている。と錯覚していたのかも知れない。それが自分の指導がその児童生徒にどう受け止められ、いかに心に響いたのか、という事後の「変化」にまで注目することを忘れてしまふという結果を引き起こす。

自分によく動いていると自己満足に陥る危険性。児童生徒に対して何らかのアクションを起こしたら、次に大切なことは、**変化を見守り、観察すること**。そこから教師と児童生徒の心の通い合いが生まれ、教師と一緒に支援してあげられる素地ができあがってくるのだと思う。

研修の感想

教育評価講座

○ PDSAサイクルに取り組み、自分の指導に責任を持てるようになりたい。(小・S)

○ 「学力＝教員の授業力＋学校の総合力＋子どもの学習努力＋家庭の教育力」であるという点は、改善すべき観点が分かりやすい内容で、大変参考となりました。(小・K)

○ 学習指導要領改訂の経緯や教育の考え方、我々教員に対する叱咤激励など身が引き締まる思いで聞かせていただいた。(中・A)

○ 教師としてプロとして結果を出す、責任を持つ、そのためには、どうするかを十分学べた講座でした。(中・T)

○ 印象に残ったことは、「結果に責任を持つ」「教えることに謙虚になり研修をつむ」ということです。(中・K)

授業改善・指導技術 ⑩

～ 発問・板書の仕方の工夫…その2 ～

1 考える力を育てる発問・板書の工夫

◎ 子どもが学習しているときの思考は、おおむね、情報収集→分類、削除、整理→学習成果としての統合
そこで、大切な役割を果たすのが発問・板書です。

(例) ○子どもが発表した内容を板書(情報)し、「似たような事柄は一緒にして仲間分けしよう。」と発問して分類という思考を促す。「どうしてこの事柄は一緒にならないか。(削除)」「このまとまりにあう小見出しをつけましょう。(整理)」と発問し、色チョークや符号を使いながら分類の過程を板書する。

2 考える力を磨くための発問・板書の工夫

◎ 学習過程では、全体を見通す力、新しいことを創り出す力、しくみを考える力、筋道を立てて考える力、比較して考える力などのさまざまな考え方が働きます。そこで、考える力を磨ききっかけとなるのが、発問・板書です。

(例) ○気付く…「この内容について何か気付くことはありませんか。(発問)」、学習のヒントとなるような事柄(板書)
○比べる…「この事柄とこの事柄で同じところ、違うところは。(発問)」、分類・統合などをして整理する(板書)

※ 発問と板書は表裏一体である。板書を生かしていくためには、それにつながる発問を大切にすべきであり、発問を生かすには、それに伴う板書を工夫すべきである。

学級経営のヒント ⑩

～ 共に学び、共に高め合う学級づくり ～

1 子どもにとっての「心の居場所」となる学級づくり

子ども一人一人が学級での生活によりよく適応していれば、教科学習や生活にも意欲をもって積極的に臨むことができる。この意欲や積極性が「共に学び、共に高め合う」基盤となり、子どもの個性の伸長や人格形成、学力が身に付き高まっていくことに機能する。特に、心がけたいことは、

① 子どもと教師、子ども同士の人間関係があたたかく、信頼関係を築いていくこと…ふれあい・認め合い→「共遊・協働・共学」…児童生徒理解→教師だけでなく子どもも

② どの子どもも価値ある存在であることが認められるようにすること…学級全員が支え合い、多様な考えを認め合い、自分の意見述べられる雰囲気のある学級→生活や授業で

③ 自分たちの学級は、自分たちでよくしていこうという意識を持たせていくこと…学校・学級のきまり、学習の約束事

2 共に学び、高め合う授業づくり

学校生活の大部分は、「学習(授業)の時間」です。学級が子どもにとっての「心の居場所」となり、「共に学び、共に高め合う」集団となるために、特に、心がけたいことは、

① 一人一人に基礎学力を身に付けさせること

② 自分の考え(自力解決の時間)を持たせ、表現させること

③ 学び合いの形態・場・時間や教材を工夫すること

④ 学び方を学ばせること…教科、個の学びと集団の学び

※ キーポイントは、「指導力・授業力」と「日々の実践」であることを「意識」して「行動」することと考える。